

大阪毎日新聞上海特派員村田孜郎について —— 1921 年 4 月、上海フランス租界での李漢俊（李人傑）と 芥川龍之介の面談を設定した背景を探る ——

川 尻 文 彦

要旨

芥川龍之介（1892-1927）は、1921 年 3 月末に大阪毎日新聞海外視察員として中国に派遣され、同年 3 月下旬から同年 7 月上旬に至る 120 余日の間に、上海、南京、漢口、長沙、北京など中国各地を遍歴した。その旅行記録は『大阪毎日新聞』に連載され、その後、1925 年には『支那遊記』（改造社）と題して単行本として刊行された。『支那遊記』の中で芥川は、章炳麟、鄭孝胥、李人傑、辜鴻銘の 4 名の中国知識人に面会している。このうち、李人傑は誰であるか、長らく学界の謎であった。近年、李人傑が中国共産党の創立メンバーの一人李漢俊であり、芥川との面談の場所であった李漢俊の自宅が、1921 年 7 月の中国共産党第一回党大会の会場であったことが分かった。上海で芥川を案内したのは、村田孜郎（大阪毎日新聞社上海特派員）である。村田孜郎は一体どのような人物であり、なぜ芥川を李漢俊のもとに案内することになったのか、本稿で検討を加える。

キーワード 村田孜郎、芥川龍之介、支那遊記、李漢俊（李人傑）、波多野乾一

はじめに

大阪毎日新聞の社員であった芥川龍之介（1892-1927）は、1921 年 3 月末、大阪毎日新聞海外視察員として中国に派遣されることになった。出発前に上野精養軒で開かれた送別会には、久米正雄、里見惇、与謝野晶子、菊池寛、吉井勇、小山内薫、鈴木三重吉、久保田万太郎、村松梢風、山本有三、小島政二郎ほか著名人が参集した。非常に和やかな会となったという。今日とは違い中国行きはやはり大きな出来事であったのであろう。

芥川龍之介は、大正 10 年 3 月下旬から同年 7 月上旬に至る 120 余日の間に、上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津などを遍歴した。それから日本に帰った後、「上海遊記」や「江南遊記」を一日一回ずつ執筆した。「長江遊記」も「江南遊記」の後に一日に一回ずつ執筆しかけたが未完成に終わった。「北京日記抄」は必ずしも一日に一回ずつ書いたわけではないが、全体を二日ばかりで書いた。「雑信一束」は画端書「えはがき」に書いたものをそのまま収めることにした、という（芥川龍之介『支那遊記』序、1925 年）。

「上海遊記」は 1921 年 8 月 17 日から 9 月 12 日まで『大阪毎日新聞』朝刊および『東京日日新聞』に連載され、「江南遊記」は 1922 年 1 月 1 日から 2 月 13 日まで『大阪毎日新聞朝刊』に連載され、「長江遊記」は『女性』1924 年 9 月号に、「北京日記抄」は『改造』1925 年 6 月号に発表された。その後、「雑信一束」を加えて、『支那遊記』として 1925 年に改造社から単行本として刊行された。

参考までに章立てを記しておく。「上海遊記」は海上、第一瞥（上）（中）（下）、病院、城内（上）（中）（下）、戯台（上）（下）、章炳麟氏、西洋、鄭孝胥氏、罪惡、南国の美人（上）（中）（下）、李人傑

氏、日本人、徐家匯、最後の一瞥の計 21 章である。「江南遊記」は前置き、車中、車中（承前）、杭州の一夜（上）（中）（下）、西湖（一）～（六）、靈隱寺、蘇州城内（上）（中）（下）、天平と靈巖と（上）（中）（下）、寒山寺と虎邱、蘇州の水、客棧と酒棧、大運河、古揚州（上）（中）（下）、金山寺、南京（上）（中）（下）の計 29 章である。その後、長江、廬山、漢口、洞庭湖、長沙、洛陽、北京、大同、天津、奉天、朝鮮などをへて 7 月末に帰国した。

大阪毎日新聞は大正 10 年末——つまり「上海遊記」の新聞連載が終わり、「江南遊記」の連載が始まった——の広告記事の中で、芥川龍之介の紀行文を「支那印象記」と名付け、「支那は世界の謎として最も興味深い国である。旧き支那の老樹の如く横はつて居る側に、新しき支那は嫩草〔わかくさ〕の如く伸びんとして居る。我が社はこゝに思ふ所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の「支那印象記」を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦知られて居る」としている。

つまり、この「支那印象記」は、「世界の謎」である支那のうち「新しき支那」をいち早く日本に伝えんとともに、芥川の「支那趣味」についても披瀝されることが期待されとしている。文学者としてのイメージが強い芥川ではあるが、後に単行本として出版された『支那遊記』（改造社、1925 年 11 月）の「自序」で芥川自ら述べるところでも、「『支那遊記』一卷は畢竟天の僕に恵んだ（或いは災いした）Journalist 的才能の産物」とある。つまり「恵んだ」のか「災い」したのかはともかくとして、「Journalist 的才能の産物」を大阪毎日新聞社（芥川の勤め先である）から期待されていた、と芥川も自覚していたことは確かである。

ではこの『支那遊記』は読者にどのように読まれてきたのか。それはかんばしいものではなかった。例えば、「中国蔑視」的な表現が散見される。中国社会の観察が表層的である。最新の中国事情を伝える、あるいは中国に対する文化的な関心を喚起する（大阪毎日新聞のいう「支那趣味」）等の役割を果たしたとは言い難い。芥川龍之介にとって初めての海外渡航でもあり、上海到着早々、肋膜炎をわずらい里見医院に入院することになった。渡航直前にある女性から私生児の認知を迫られるなど、心身の不調に悩まされたこともあり、ネガティブな文章表現が目につく等々の理由で研究者の間での評価は高いとは言えず、学界では半ば無視されてきた。しかし、近年『支那遊記』をめぐって新しい研究動向が生じている。中国旅行が芥川文学の新たな展開をもたらした、芥川にとって中国社会を実見することによって得た有益な知見も少なくなかった等の観点から再検討が加えられつつある⁽¹⁾。『支那遊記』の文学的な意義の再評価は必要であるし、芥川龍之介の筆遣い、センスあふれる文学的な表現についてもいま一度着目する必要があるだろう。

本稿で私が行きたいのは、芥川龍之介と李人傑を結ぶ糸を村田孜郎を通じて解明することである。つまり、芥川龍之介はなぜ李人傑に会いにいったのかということである。『支那遊記』の中で描かれた中国の新旧知識人である 4 名——章炳麟（1869-1936）、鄭孝胥（1860-1938）、李人傑（1890-1927）、辜鴻銘（1857-1928）——との会見とその記録は同時代的に見て画期的なものであった。歴史史料的な価値の他にも、東アジアにおける思想文化交流の面からも多面的な検討を加える価値がある。ただし先行研究では主に日本文学研究の立場からの言及にすぎず、日本語史料にしか使っておらず、中国現地の歴史的、文化的状況に対しては掘り下げがないまま表面的な紹介に止まっている点に研究として大きな不満が残っている⁽²⁾。

本稿で着目するのは、芥川が会見した 4 名の中国知識人の中では最も「無名」であった李人傑とその李人傑のもとへ芥川を案内した村田孜郎（大阪毎日新聞記者）の二人である。

まず村田孜郎についてである。「上海遊記」に以下のような記述がある。「埠頭の外へ出たと思うと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我々を包囲した。我々とは社の村田君、友住君、国際通信社のジョオンズ君並に私の四人である。抑 ^{そもそも} 車屋なる言葉が、日本人に与える映像は、決して薄ぎたないもの

じゃない。……処が支那の車屋となると、不潔それ自身と云っても誇張じゃない。その上ざっと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしている。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸しては、大声に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人などは、少からず不気味に感ずるらしい。」(『二 第一瞥(上)』)と。上海の埠頭に上陸早々、人力車夫の群れに取り囲まれ、その異様さと異臭に当惑したことを伝える有名な場面である。出迎えたのが「村田君、友住君、国際通信社のジョオンズ君」であり、村田孜郎がここである村田君である。村田孜郎はその後、芥川に付き添いの案内役をつとめることになり、文中にも頻繁に登場する。『支那遊記』には日付の記述はないが、ほぼ訪問順通りの叙述であるから、村田がどこまで同行したのかは分かる。芥川はその後、上海を出て、嘉興を過ぎ、杭州に向かう。村田も杭州へ同行する。杭州では杭州城内、西湖で遊び、その後、西湖のほとりの新新旅館まで村田は同行した。芥川は新新旅館から霊隠寺に向かうが、それに村田が同行したかどうかは分からない(『江南遊記・十二霊隠寺』)。その後、村田は「江南遊記」には登場しないので、杭州まで同行し、芥川と別れた。杭州の次の目的地蘇州へは代わって島津四十起が同行した(『江南遊記・十三蘇州城内(上)』)。

一 芥川龍之介が李人傑と会った日時

芥川龍之介は村田孜郎につきそわれて李人傑に会いに行った。李人傑とは何者であるか？ 結論から言えば、李人傑は中国共産党の創立メンバーの一人李漢俊である。「上海遊記・十八李人傑氏」は、李漢俊の紹介記事としてはおそらく日本初である。ただし当時そのことに注目する日本人はいなかった。『支那遊記』を読んでも、芥川のいう李人傑が一体何者なのか、分からなかったのである。当時中国でいくらか登場しはじめた西洋型の教養のある新しいタイプの知識人である程度にしか伝わらなかったであろう。実は、1971年に筑摩書房から刊行された『芥川龍之介全集』第八巻の「支那遊記」によれば、李人傑についての全集編者注には「未詳」と書かれていた⁽³⁾。つまり、1970年代に至るまで、李人傑とは誰だか分からなかったのである。その後の研究によって李人傑は李漢俊であることが判明した⁽⁴⁾。

芥川は李人傑の自宅に赴き、その様子を描写している。

「^{どう}僅あり、直に予等を引いて応接室に到る。長方形の卓一、洋風の椅子二三、卓上に盤あり、陶製の果物を盛る。この梨、この葡萄、この林檎、——この拙き自然の模倣以外に一も慰むべき装飾なし。然れども室に塵埃を見ず。簡素の氣に満てるは愉快なり。」

「我々の通った応接室は、二階の梯子が部屋の隅へ、じかに根を下した構造だった。その為梯子を下って来ると、まず御客には足が見える。」

李人傑の自宅はメゾネットタイプのアパートであり、李人傑の寝室は2階にあり、客間が1階にある。芥川と村田は1階で李人傑が階下に降りてくるのを待っていたのであった。なおこの1階の客間が3か月後に中国共産党第一回党大会の会場となる。芥川のこの文章が後の中国の歴史家によって中国共産党第一回党大会(参加者10数名の秘密会議であった)の会場の描写として高い資料価値を与えられることは芥川にとって知る由もない。

さて芥川は村田とともに李人傑と対面する。

「村田君と共に李人傑氏を訪う。李氏は年いまだ二十八歳、信条よりすれば社会主義者、上海に於ける『若き支那』を代表すべき一人なり。途上電車の窓より、青々たる街路の樹、既に夏を迎えたるを見る。天陰、稀に日色あり、風吹けども塵を揚げず。」

「数分の後、李人傑氏来る。氏は小づくりの青年なり。やや長き髪。細面。血色は余り宜しからず。才気ある眼。小さき手。態度は頗る真摯なり。その真摯は同時に又、鋭敏なる神経を想像せしむ。刹那

の印象は悪しからず。^{あたか} 恰も^{かつ} 細且強靱なる時計の^{ぜんまい} 弾機に触れし、卓を隔てて予と相対す。氏は鼠色の^{タテクワル} 大掛児を着たり。」

李人傑は 1890 年生まれなので、芥川という 28 歳より 2、3 歳は上である。当時の中国人留学生によくあることだが、日本での学校進学時に年齢を少なめに申請し、日本の学齢と合わせた可能性もある。外見は若々しく、後年残された写真と同じイメージである。まさに「若き支那」を体現している。



では村田は芥川をなぜ李漢俊に会わせたのか？ 芥川は「李氏の話しぶり
は、如何にもきびきびとしたものだった。一緒に行った村田君が、「あの男
は頭が好かもんなあ。」と感嘆したのも不思議じゃない。」と述べる。流暢な
日本語を操り、頭脳明晰な李漢俊は芥川にも村田にも強い好印象を残した。
先に面会した章炳麟や鄭孝胥はそのようなよい印象を残さなかった。同席し
た村田孜郎が「あの男は頭が好かもんなあ。」と感嘆したところをみると、
村田も李漢俊と初対面だったことが分かる。村田孜郎は『支那の左翼戦線』
(万里閣書房、1930 年) の中で、陳独秀に会うための紹介状を李漢俊からも
らったと書いてある⁽⁵⁾。村田は李漢俊との面会后、李漢俊と親しくなり、連
絡をとるようになったようだ。

芥川は「李氏は留学中、一二私の小説を読んだとか何とか云う事だった。
これも確かに李氏に対する好意を増したのに相違ない。」と述べる。李漢俊
が芥川文学に対する興味を示したことで、芥川の李漢俊に対する好印象が増
した。しかし、管見の限り、李漢俊の残した文章から芥川文学への言及はない。魯迅は芥川がちょうど
中国を訪問中の 1921 年 5 月と 6 月に芥川の『鼻』と『羅生門』の中国語訳を『晨报副刊』に発表し、
あわせて「訳者附記」を記している。これが中国における最初の芥川文学に対する批評ということにな
る。芥川の訳文は 1923 年 6 月出版の『現代日本小説集』（魯迅・周作人訳）に収録され、それを読んだ
芥川は「日本小説の支那訳」と題した文章を書き、「翻訳は、僕自身の作品に用すれば、中々正確に訳
してある。その上、地名、官名、道具の名等には、ちゃんと注釈をほどこしてゐる⁽⁶⁾」としている。中
国での自分の評価を気にしていることがわかる。1927 年の芥川の自殺は中国の文壇でも大々的に報
じられ、反響を呼んだ。1920 年代から 1930 年代にかけて芥川的主要な作品はほとんど中国語に翻訳さ
れたといってもよく⁽⁷⁾、一種の「芥川ブーム」があった⁽⁸⁾。しかし、奇妙なことに当時の中国の文壇は
芥川の文学に対して高い評価を与えたようにはみえない。いずれにせよ、李漢俊から芥川の作品を読ん
だと直接言われた芥川の喜びは想像できる。

さて面談の日時はいつであろうか？ 上海の現地感覚を持つ徐静波（復旦大学）は「途中電車の窓よ
り、青々たる街路の樹、既に夏を迎えたるを見る」という芥川の描写から 5 月中旬前後であると推定す
る⁽⁹⁾。他方、石川禎浩は 4 月 25 日前後とする⁽¹⁰⁾。石川禎浩が根拠とするのは、『芥川龍之介全集』に収
められた中国滞在中の芥川の書簡である。

1921 年 4 月 26 日付佐々木茂索（時事新報）宛て書簡では、「鄭孝胥、章炳麟などの学者先生に会つ
た。鄭先生などはずっと前から知つてゐたから会つた時にはなつかしい気がした。章先生も同様。……
襟垢のついた着物を着て古書堆裡に泰然としてゐる所は如何にも学究らしかった⁽¹¹⁾」とある。ここか
ら、4 月 26 日以前に鄭孝胥、章炳麟に会ったことが分かる。

その後、1921 年 4 月 30 日沢村幸夫宛て書簡では、「何処へ行つても必^マ人が「沢村さんから手紙が来
まして etc.」と云ひます私の為にあなたが方々へ紹介状を出して下さつた難有さが異国だけに身にしみ
ますおかげで短い日数にしては可成よく上海を見ましたこれは村田君も保証してくれます人では章炳
麟、鄭孝胥、李経（？）^{ママ} 遇等の旧人及び余穀民李人傑等の新人に会ひました李人傑と云う男は中々秀才
です⁽¹²⁾」とある。

石川禎浩はこの書簡から沢村幸夫（1883-1942）を通じて芥川龍之介は李漢俊を紹介してもらったと推定する⁽¹³⁾。沢村幸夫は当時、大阪毎日新聞で村田の年長の上司であり、芥川の中国訪問の企画立案者の立場にあった。しかし、この書簡を素直に読む限り、芥川龍之介は沢村幸夫に中国における多くの紹介の便をはかってもらったとはいえるが⁽¹⁴⁾、李漢俊は沢村幸夫が紹介したとまではいえない。また4月26日と4月30日付けのこの二通の書簡を見る限り、4月26日以前に鄭孝胥、章炳麟に会い、李漢俊に会ったのは4月26日から30日までの間ということになる。西田禎元は芥川の書簡を丁寧につきあわせた考証を経て、鄭孝胥とは4月24日（村田孜郎が同行通訳）、章炳麟とは4月26日（西本省三が通訳）であるとし、李人傑との面会は4月30日であると推定する⁽¹⁵⁾。私（川尻）も4月30日説を支持する。4月23日に退院して⁽¹⁶⁾（4月24日付薄田淳介宛書簡）、翌24日に鄭孝胥と面会しているからかなりのハードスケジュールである。

『支那遊記』を見る限り、芥川龍之介は中国で章炳麟、鄭孝胥、李人傑、辜鴻銘の四人に面会した。このうち辜鴻銘のみ北京で面会した。辜鴻銘については、芥川は上海を去るに当たり、ロイター通信のジョーンズ（Thomas Jones, 1890-1922）から「紫禁城は見ざるも可なり、辜鴻銘を見ること忘る勿れ。」（『北京日記抄 二辜鴻銘先生』）と強い勧めがあったことを明かしている。残りの章炳麟、鄭孝胥、李漢俊を紹介したのが誰であるかは、『支那遊記』の文面から確定できない。芥川は上述の書簡で鄭孝胥、章炳麟についてはずっと前からその名を知っていたと述べる⁽¹⁷⁾。鄭孝胥、章炳麟は日本でもすでに名の通った学者であり、知り合いの日本人ジャーナリストも多くいることから、紹介のつては容易に見つけることができたであろう。しかし、李人傑は年齢的にも若く、「無名」である。李人傑は「若き中国」の一人として認識されていたが、それ以上ではなかったのである。なお芥川は後日の辜鴻銘との面会を描写する際に、「ヤング・チャイニイズ」と対比し、「ヤング・チャイニイズと異なり、西洋文明を買い冠らず、基督教、共和政体、機械万能などを罵る」（『北京日記抄 二辜鴻銘先生』）として辜鴻銘を紹介している。当時の日本のジャーナリズムで言われていた中国での新しい思想潮流の担い手として「若き中国」と呼ばれていたのである⁽¹⁸⁾。

小澤保博は「芥川龍之介の上海訪問時の面談の顔ぶれを見るとその人選の卓越している事に驚かされる。その後の支那の運命を左右する政治的立場を異にする人物の人選が、成された。大阪毎日新聞上海支局の総力を挙げて企画、立案であったであろう⁽¹⁹⁾。」と推測する。しかし、具体的に誰が人選したかについては解明できていない。そこでこの謎をとく手がかりとして、まずは上海での主たる同行者であった村田孜郎について調べる。村田孜郎については伝記的な研究すら皆無であるからである。

二 村田孜郎とは

村田孜郎（むらた・しろう ?-1945）は1910年代から40年代にかけて上海を中心に活動した新聞記者である。佐賀県に生まれ、東亜同文書院を卒業した。佐賀藩主一門・村田家に生まれ、青年時に遊びが過ぎて勘当を受ける。のち大阪毎日新聞に入社し上海支局長、東京日日新聞の東亜課長、読売新聞の東亜部長などを歴任し、昭和20年戦後の上海で客死した。中国語に堪能で、中国を紹介した著書も多い。著書に「支那の左翼戦線」（昭和5年）、「蒙古と新疆」（昭和10年）、「支那女人譚」、「宋美齡」（昭和14年）、共訳に「支那は生存し得るか」（昭和12年）などがある。

村田孜郎は上海で訪中した日本の文学者たちを案内した。芥川龍之介に加え、谷崎潤一郎、金子光晴などがそれぞれ旅行記の中で村田に言及している。村田は中国の事情に通じたいわゆる「支那通」のジャーナリストであった。同時に、京劇通であり、梅蘭芳の来日公演に際し、『支那劇と梅蘭芳』（玄文社、1919年）を著し、日本において梅蘭芳の紹介者の役割を果たしたこともよく知られている。

村田孜郎の著書や翻訳書はきわめて多く、ざっと調査した限りでも、単著十数冊、翻訳書十数冊、共

著二十冊ほどである⁽²⁰⁾。だが、村田はプロフィールやあとがきなどで自らの経歴を語ることはなかった。多くの研究者が依拠しているのは、『東亜同文書院大学史』（滬友会、1982年）の「第九期生銘々伝」と「各界における同窓の活動」の記述である。「第九期銘々伝」の中で、新聞界で異彩を放った者として、村田孜郎（佐賀）の名を挙げ、「村田は北京の順天時報から大毎の特派員となり、さらに東日論説委員、読売東亜部長など、天衣無縫の活躍を続けた⁽²¹⁾。」と述べる。『日本新聞年鑑』第1巻～第16巻（新聞研究社、1921～1937年）の記事によれば、村田孜郎は、1920年頃までに、順天新報、泰東日報、共同通信の記者を経て、大阪毎日新聞社の上海支部に勤務し、その後、1928年には大阪毎日新聞社東亜通信部副部長を務め、1932年には、東京日日新聞社東亜課長に就任、1937年には読売新聞社東亜部長を歴任した⁽²²⁾。このうち、『泰東日報』は1908年11月に『遼東新報』（1905年10月、金子雪斎（平吉 1864-1925）、末永純一郎（鉄巖）によって大連で創刊）を大連華商公議会の出資により再編し、創刊された。1911年、公議会の手を離れ金子と数人の中国人有力者による新聞となった頃から、村田孜郎は編集者として金子を助けた⁽²³⁾。1941年に読売新聞を退職した後は、1939年に上海市政府顧問、その後日本大使館囑託として、キャッセイ・マンション（今日の錦江飯店）に住み、1945年に上海で客死した⁽²⁴⁾。晩年までジャーナリストとしての生涯をまっとうした。

『東亜同文書院大学史』の第3章「各界における同窓の活動」「三、言論・報道界」には、「村田孜郎（号烏江）、戦国武将龍造寺家の客分の家系で、フランス文学をやった父の血をうけて文学の才に恵まれていた。卒業後順天時報より大連の泰東日報、北京の共同通信を経て、東京日日（毎日新聞）に転じ、論説委員、さらに読売東亜部長となったが、昭和十四年上海市政府顧問、さらに日本大使館囑託となり、同二十年病没した。村田は終始支那劇に凝り、順天時報時代、少年俳優白牡丹（のちの筍慧生）と懇意となったり、大正八年梅蘭芳一行の東京帝劇出演の時には、その東道として来朝したりした。著書『支那劇と梅蘭芳』『支那の左翼戦線』『支那女人絵巻』『支那辺境物語』『支那政治思想史』⁽²⁵⁾」とある。後の研究者、人名辞典の類はこの『東亜同文書院大学史』の記述を踏襲しており、それ以上の情報を発掘できていない。

ここに出てくる「戦国武将龍造寺家の客分の家系」と「フランス文学をやった父」に関連して、村田家（龍造寺家）は肥前藩（佐賀藩）の家老の家系で、知行高は1万770石と大名級であり、佐賀藩の「筆頭家老」ともいえる家柄であった⁽²⁶⁾。村田家の人物としては、幕末の最初期の受礼者として知られる村田政矩（1812-1872）の名が挙がることが多い。村田政矩は幕末から明治にかけての著名な「お雇い外国人」ギドー・フルベッキ（1830-1898）の薫陶を受け、1866年には洗礼を受けた⁽²⁷⁾。息子政匡（龍吉郎）、その娘も受礼した。ギドー・フルベッキはいうまでもなく坂本龍馬、西郷隆盛、高杉晋作はじめ明治維新の志士たちが一堂に会した「フルベッキ写真」でその名を知られている。村田政矩はじめ村田家は財産家で、西洋の学問に強い関心をもっていた。龍吉郎の子虎吉郎の子村田隆長（1899-1968）は久保田村長もつとめた地元の名士であった。ただし、村田孜郎との関係については分からない。今後の課題として残しておく。

さて村田孜郎は芥川龍之介を案内する前年の1920年9月に上海に着いた。上海到着直後の村田の動向については、先行研究では未解明であったが、幸いにも大里浩秋が丁寧に整理した『宗方小太郎日記（1920～21年）』によって詳しく追跡することができる⁽²⁸⁾。1920年9月22日の午後の日記に「平川夫人、平川清風来り告別。大阪毎日特派員村田孜郎来訪。平川の後任として昨日来着せる者也。六時半平川の送別会に倶楽部に赴く。出席五十余人、九時半散。」とある。倶楽部は日本人倶楽部（1883年設立）のことで、日本人倶楽部とは上海在住の日本人の交流を目的とした社交場で、1914年に新たに新設されたビルは塘沽路309号にあった⁽²⁹⁾。宗方小太郎はその後、村田と何度も会い、親しく接している。気が合ったのであろう。村田孜郎は平川清風（1891-1940）の後任として上海に着任したことが分かる。平川清風は熊本県出身のジャーナリスト、1915年東京帝国大学法学部政治学科卒業後、大阪毎

日新聞社に入社、1917年から1920年まで上海特派員として孫文ら著名な政治家を直接取材した。代表作は『支那共和史』（春申社、1920年）である。その『支那共和史』の序に西本白川に対する言及があり、『支那共和史』の執筆に当たり西本白川から多くの資料提供を得たと書いてある⁽³⁰⁾。西本省三（白川）（1878-1928）は「支那通」の一人で、1913年に宗方小太郎、島田数雄、佐原篤助や清朝遺臣の鄭孝胥らとともに上海で春申社（後に、上海週報社、上海雜誌社へと社名を変更した）を設立し、雑誌『上海』の発行を始め、自ら主宰した⁽³¹⁾。清朝復辟論者としても知られ、中国知識人との交遊範囲も広がった。章炳麟との面会では通訳を担当した。鄭孝胥の面会の設定は西本によるものかもしれない⁽³²⁾。

宗方小太郎日記には上海滞在中の芥川龍之介も3回登場する。1921年3月30日の日記に「大阪毎日新聞社員芥川龍之介、村田孜郎来訪。」とあり、30日には上海に着いていた⁽³³⁾。4月2日の日記に「万歳館に芥川龍之介を訪ひ、通信社に小談、帰。」とある⁽³⁴⁾。上海着後、村田孜郎とともに東亜洋行（ホテル）〔芥川の聞き間違えで、正確には東和洋行〕に向かった（「上海遊記 二第一瞥（上）」）。大阪の社にいた沢村幸夫の手配によるものだったが、芥川は室内が暗く汚く、椅子も満足なものがなく、金玉均が暗殺された場所であると小耳にはさんだこともあって、東亜洋行が気に入らなかったらしい⁽³⁵⁾。近所の万歳館（明治37年（1904年）開業の日本人経営の旅館）に移っていたのである。その後、病氣療養もあって、4月2日から3週間近く空いて、4月21日の日記に「六時半波多宅の晩餐に赴く。島田、井出、西本、村田、林出、芥川、太田同坐たり。十一時散ず。」とある。同席しているのは、順に波多博、島田数雄、井出三郎、西本省三、村田孜郎、林出賢次郎、太田外世雄である。このうち宗方小太郎、波多博、西本省三などは春申社の成員であり、上海における日本人ジャーナリスト仲間の中で日常的に情報交換を行っていた。宴席の同席者に東亜同文書院の関係者も多い。村田は東亜同文書院卒業生のネットワークも利用し、情報収集を行っていた。宗方小太郎らは、上海の鄭孝胥、章炳麟、李經邁、余洵と往来があったものの、李漢俊とは交流がなかったとみられる⁽³⁶⁾。

三 村田孜郎と波多野乾一の関係

村田孜郎の中国情報源を知るうえで、波多野乾一（1890-1963）に触れなくてはならない。波多野は、大阪朝日新聞の北京留学生より東京日日新聞に転じ、その後北京新聞主幹、時事新報北京特派員、同本社論説委員などを経て新聞界を去り、外務省に入り、中国共産党の研究に没頭し、その後、全七巻の大著『中国共産党史』を編纂した。これは広く世界に誇る研究とされている。戦後は産業経済新聞論説委員として名声が高かった。著書はほかに『赤色支那の究明』『中国国民党通史』『支那の政党』『支那劇大観』など多数ある。コロンビア大学ウィルバー教授編『中国共産党史についての日本の資料』には、彼の著二十一種が採録されるなど、中国問題とりわけ中国共産党史研究の世界的権威とされる⁽³⁷⁾。

波多野乾一は村田孜郎と東亜同文書院大学の親しい同期生・友人であった（村田の生年は不明であるが、波多野の生年が1890年なので、その前後であろう）。波多野は後の回想で「同じ大毎の特派員で、上海で氏を東道した村田孜郎君は、氏と大分意気投合したといふことだつた。北京に来了後、松本鎗吉君に向つて『君の社の支那特派員は、皆恐ろしく変わりもんだネ。』と評したさうだ。上海で奇人の村田君に会ひ、北京で屁人の私を見たのだから、なるほどこんな批評が出る筈だと思つた⁽³⁸⁾。」とある。さらに波多野は「沢村幸夫氏は、芥川氏の支那旅行の企画者だつた」と述べている。上海滞在中は芥川宛の郵便物は村田孜郎気付となっていて、芥川の書簡に村田の住所（四川路六十九号）が記されている⁽³⁹⁾。大阪毎日新聞の上海支局であろう。北京滞在中については波多野乾一宛（北京崇文門内八宝胡同波多野乾一氏気付）となっている⁽⁴⁰⁾。上海と北京での案内責任者はこの二人であったことを示している。芥川龍之介の中国訪問は、沢村幸夫の立案にはじまり、波多野と村田の二人によって実行に移されたとみられる。

四 李漢俊の居所の場所について

芥川龍之介が村田孜郎とともに訪れた李人傑の居所、すなわち中国共産党第一回党大会の場所は、上海貝勒路樹德里 108 号（望志路 108 号、今の興業路 8 号の後門である）。この建物は 1920 年の秋によく完成し、李漢俊は兄の李書城とその妻薛文淑とともに白爾路三益里 17 号の『星期評論』社から引っ越してきた。望志路沿いにメゾネットタイプの（1 階と 2 階がつながっている）の 5 軒の家がレンガで建てられた。李漢俊と李書城は望志路 106 号と 108 号（今日の興業路 76 号と 78 号）の隣りどうしの 2 軒を借りた。望志路周辺は比較的静かであり、革命活動に適していた。また李書城は北洋政府の高官でもあったので、官憲の目をくらすこともできたかもしれない。この建物は 1920 年秋に完成し、同時にさらにその左右隣りに 4 軒ずつの建物も建ち、貝勒路樹德里（今の黄陂南路 374 弄）の一部となっている。李漢俊・李書城一家は二つの建物の壁をぶち抜いて、階段を一つにし、一家とした。106 号の二階を李漢俊の寝室とし、一階を客間とした。中国共産党第一回党大会はこの客間で行われた。この建物の南側は畑であり、この一帯はまだ都市化されていなかった。

李漢俊は、この望志路に移ってくる前には、白爾路三益里 17 号にいた。『星期評論』社である。『星期評論』は 1919 年 6 月 8 日に、戴季陶、沈玄盧、孫棣三の編集によって毎週日曜日に発行され、『民国日報』と一緒に販売されたが、1920 年 6 月 6 日に停刊した。計 53 期。編集部は当初愛多亜路新民里 5 号（今の延安東路）にあったが、1920 年に白爾路三益里 17 号に移り、戴季陶、沈玄盧がここに住んだ。李漢俊は 1920 年初めにここに移り住み、『星期評論』の編集を引き継いだ。『共産党宣言』の中国語訳で知られる陳望道もこれに加わり、入居した⁽⁴¹⁾。邵力子は『民国日報』副刊の『覚悟』の主編で、李漢俊は副刊の編集を助けていた。『民国日報』は『星期評論』の印刷も請け負っており、『星期評論』と『覚悟』の関係は密接であった。邵力子と李漢俊は三益里の同じ弄堂内に住み、邵力子は 5 号、李漢俊と李書城は 17 号に住んだ。

1919 年に李漢俊が上海に来たばかりの時には、新漁陽里 6 号（後に銘德里と改名、今の淮海中路 597 弄 6 号）に住んだ。新漁陽里は 1916 年に完成していた。その後、李漢俊は兄李書城とともに三益里に移った。この新漁陽里 6 号の家は戴季陶が代わって住むことになったが、後に戴季陶が共産主義運動と袂を分かつことになり、新漁陽里を離れた。1920 年にロシア華僑である楊明斎が新漁陽里を活動場所とし、中俄通訊社を設け、自ら社長となった。8 月 22 日に上海社会主義青年団、9 月に外国語学社、11 月 21 日上海機器公会が成立し『機器工人』を出版し、1921 年初めに中国社会主义青年団が成立した。中国共産党関係の重要機関が相次いでこの場所で誕生することになる。

1920 年 1 月に陳独秀（1879-1942）は投獄されていた北京から上海に戻った。陳独秀は 1915 年に日本から上海に戻り『青年雑誌』を創刊し、住居および『青年雑誌』の編集部はフランス租界の嵩山路吉誼里 21 号にあった⁽⁴²⁾。1917 年に北京大学に移るまで上海にいたから、およそ 3 年ぶりの上海になる。漁陽里 2 号に住まいを定め、1920 年 12 月に広州に行くまで住んだ。この環龍路漁陽里（今の南昌路 100 弄、俗に老漁陽里といわれる）2 号は、2 階建てで、1912 年に建てられ、もともとは安徽省都督の柏文蔚の住宅である。陳独秀と柏文蔚は同郷の親友であり、陳独秀が北京から上海に移った時、住居を探していたが、柏文蔚がたまたま上海を離任することになり、陳独秀がここに住むことになった。2 階には陳独秀夫婦の寝室があり、1 階の客間は『新青年』の編集部があつて、会議等も行われていた。陳望道、沈雁冰、李漢俊など『新青年』の編集作業に参加した人たちは、いつもここにいたり、居住したりした。ここは社会主義研究社や上海中共發起組の活動場所でもあつた。村田孜郎は「以前は『新青年総編輯所』といふ看板が掲げてあつたが雑誌が官憲の圧迫で広東に移されてから取外され今はない⁽⁴³⁾」と証言しているので、村田孜郎は同所をしばしば訪れていたのであろう。

以上の四か所はすべて李漢俊の生活圏、活動領域と関係があり、しかも互いに徒歩圏で至近である。李漢俊（1890-1927）は1918年に東京帝国大学を卒業し、武漢に戻った後、1919年に上海に至り、孫文の側近である戴季陶の率いる『星期評論』の編集に携わり、マルクス主義の宣伝に従事した。陳独秀が広州に移った後は、陳望道とともに『新青年』の編集に携わった。李漢俊は当時、上海の党組織では陳独秀に次ぐ地位にいたとされる。

李漢俊は上海代表として中国共産党第一回党大会に参加するとともに、会議の準備作業を中心的に行った。会議の場所は李漢俊が決めたもので、李書城の居所である。李書城が外地に避暑に出かけていて空き部屋になっていたからである。代表の宿舎は同じく上海代表として参加した李達（1890-1966）が決めたもので、博文女校である。王会悟の回想によれば、王会悟が博文女学校校長の黄紹蘭を李達に紹介したことによる。李達は李漢俊と同じく日本留学組である。1920年夏に李漢俊より少し遅れて日本から上海に戻り、陳独秀を訪問し、陳独秀や李漢俊が中国共産党の組織作りに取り組んでいるのを知り、それに加わり、環龍路漁陽里2号（今の南昌路100弄2号）に住むようになった。1920年11月に『共産党』を創刊し、主編となった。

1919年から1921年にかけて社会主義、マルクス主義を宣伝したり、中国共産党成立を推し進めた知識人たちはすべてフランス租界に住んでいた。以上の四つの場所は、呂班路（今の重慶南路）の両側に位置している。東側には『星期評論』社と望志路の李書城・李漢俊兄弟宅、西側には陳独秀の住所と新漁陽里6号があった。

前出の柏文蔚、李書城はともに古い中国同盟会の会員であり、民国初年の高官つまり孫文の部下であった。この二人が上海にいたのは、孫文が1917年から1921年まで上海に居を構えたことと関連がある。上海のフランス租界に国民党の活動基地があったのである。李漢俊が上海にたどり着いたのもその兄李書城を頼ってのことであった。李漢俊は孫文ら国民党系の人々と親しい関係を有していた。近年あらたに李漢俊の回想録『十四年前の回顧』（1926年3月12日、『国民新報』「孫中山先生逝世週刊記念特刊」）が発見され、孫文らとの親しい関係についても詳しく語っている。上海在住時には親しい「常客」として孫文宅に出入りしていた⁽⁴⁴⁾。李漢俊は1919年9月23日には訪中した宮崎龍介（宮崎滔天の長子）をともなってフランス租界莫利愛路29号に孫文を訪ねている。宮崎龍介は東京帝国大学の同窓であり、在学中から親しかった。

五 村田孜郎と孫文の関係

袁世凱の憤死の直前、孫文は1916年5月1日に廖仲愷と戴季陶らを伴って秘密裏に東京から上海に戻り、薩坡賽路（今の淡水路）14号の陳其美のもとに身を寄せた。ほどなく5月19日に宋慶齡（1915年東京で結婚）も日本から戻った。孫文と宋慶齡夫妻は、フランス租界洋涇浜55号（愛多亜路（今の延安東路）の東端）にあったフランス語新聞社のL'echo chine（『中法新匯報』1897年創刊）に孫文と親しかった記者のWaicy（中国名は韋玉泉）を頼ってしばらく寄宿した。その後、6月下旬にフランス租界の環龍路63号（今の南昌路59号）に住居（孫中山寓所）を構え、胡漢民、朱執信、廖仲愷とも同宿した。1916年7月、中華革命党は東京から上海に移り、環龍路44号（今の南昌路180号）に本部を構えた。孫中山寓所の真向かいである。中華革命党幹部や胡漢民、朱執信、廖仲愷、蔣介石なども近所に住んだ。1917年7月に孫文は護法運動を発動し1918年5月まで上海を離れ広東に留まった。その間、1917年9月に孫文は中華民国軍政府大總統に就任するが、1918年に入り辞任する。1918年6月26日に再び上海に戻り、莫利哀路29号（今の香山路7号）に住居（今の孫中山故居）を定め、『孫文学説』『実業計画』の著述に専念した。1919年には、孫文は戴季陶らに『星期評論』を、朱執信らに『建設』月刊を創刊させた（『建設』編集部は環龍路44号）。1919年10月10日に孫文は中華革命党を中国

国民党に改組し（本部は環龍路44号）、総理に就任した。国民党の幹部たちが執務し、コミンテルンのヴォイチンスキー（Grigori Naumovich Voitinsky, 1893-1956）らと面会するなど、1916年6月7日から1923年の国民党改組まで、環龍路44号は国民党の活動の中心であった。国民党の関係者は近所に居住した。例えば、章炳麟は1917年から1922年までフランス租界の呂宋路（今の連雲路19号）に住んでいた⁽⁴⁵⁾。李書城は中華民国軍政府参謀長であり、孫文の軍事秘書で、1916年から18年の間に上海にあり、まず白爾路、後に望志路に移った。陳炯明が広州を制圧したため、孫文は1920年11月に広州に赴き、軍政府を再開した。1921年4月、孫文は「非常大總統」に就任し、北伐を開始する。12月にコミンテルンのマーリンと会見した。1922年6月に孫文は陳炯明の反乱に遭い、広州を逃れて上海に帰った。1922年8月にヨッフエと会談した。1923年1月、孫文はヨッフエと共同宣言を発表し、3月広州に帰って大元帥府を設け、ボロージンを顧問として国民党改組を準備した。1924年1月、国民党第一次大会が広州で開かれ、国共合作が正式に成立した。1月から8月にかけて孫文は「三民主義」講演を行った。11月、国民会議召集を呼びかけて、北上した。途中、日本に立ち寄り、神戸で「大アジア主義」講演を行った。12月、天津に戻り、病に倒れた。

村田孜郎は以上で述べたような1920年代前半の最晩年の孫文と親しく付き合った。村田は1920年9月に上海に来てすぐに孫文と信頼関係を築いていた。村田は孫文のところによく出入りしていた、と記したうえ、「大亜細亜主義」「日支露同盟論」がこの時期の孫文の持論であったと認めている⁽⁴⁶⁾。

1924年11月22日に孫文一行は上海丸で上海から日本に向かった。宋慶齡、戴季陶、李烈鈞らが同行した。行程は、23日に長崎着、24日に神戸着。古島一雄、萱野長知、宮崎龍介、山田純三郎や在日華僑の歓迎を受けた。28日に神戸高等女学校で有名な「大アジア主義」講演を行った。11月30日に上海に向けて神戸を出港するまで、四回講演、六回記者会見を行う（日本語通訳はすべて戴季陶が担当した）。

同行記者をつとめた村田は「孫文氏一行を乗せた上海丸は廿二日朝八時上海を発した」として、「余り船に強くない孫文氏は特等室に引籠り夫人も姿を見せない」ため、「船が呉淞を出てから私（村田特派員）は戴氏の船室に行つて長い雑談を交した。二三年前にくらべると角がとれて円満になつた戴氏は日本人も及ばない流暢な日本語を語った。」と記している⁽⁴⁷⁾。孫文は日本の新聞記者に対して丁寧に対応したとされるが、船上においてはもっぱら自室で休息していたとみられる。村田は戴季陶とも上海赴任直後からのつきあいであった。

船上で村田孜郎は孫文を通訳の戴季陶を介して面談し、孫文の考えを取材した。当時の孫文は、中国の不平等条約撤廃要求を日本が率先して援助し、実現に協力してほしいというものだった。村田がかかわった記事は「東亜の一国である事を忘れて了つた日本——感慨深い七年目の来朝」（『大阪毎日新聞』1924年11月23日）、「欧米諸国の野心が支那動乱の原因——上海出発前に孫文氏が日本新聞記者に発表した意見」（『大阪毎日新聞』1924年11月23日）、「支那を救ふにはこの機を措いてない——孫文氏は語る」（『大阪毎日新聞』1924年11月24日）である。これらはいずれも当時の孫文の対日観、日本および日本人に対する要望、不満を率直に語っていて、神戸到着後に行なった有名な「亜細亜主義」演説を理解する上でも有力な手がかりになる貴重な資料である⁽⁴⁸⁾。

六 1920年前後の中国の思想界

村田孜郎が芥川龍之介を連れて李漢俊に会いに行つたのが1921年4月末であるから1921年7月に行なわれたとされる中国共産党第一回党大会の3カ月ほど前ということになる。しかし、学界の通説では、中国共産党は1920年の秋か冬には事実上成立していたとされることが多い⁽⁴⁹⁾。となると村田や芥川は中国共産党員の李漢俊に会いに行つたのであろうか？

波多野乾一は戦後の日本で広く読まれたその著書『中国の国民党と共産党』（弘文堂、1955年）の中で以下のように述べる。

「一九二〇年五・六月ころ兩人〔陳独秀とヴォイチンスキー〕の歴史的会見がおこなわれ、その結果同年九月、上海フランス租界ジョッフル路漁洋里^{マツ}二号の『新青年』総発行所（陳の自宅）で中国共産党が成立した。漁洋里でのこの会合は創立発起人会の程度だったが、ともかく党はこれによって成立したのである。中華人民共和国成立後の中国資料は、党成立期を一九二一年七月の第一回党大会としているが、わたくしはとらない。というのは、一九二〇年すでに党機関誌『共産党』が創刊せられ、その第二号をわたくしが所持しているからである。……創立発起人会の参加者は陳独秀・戴季陶（天仇）・沈定一（玄廬）・陳望道・李漢俊・施存統・楊明齋・張太雷・周仏海・張東蓀・邵力子等十数名。戴は国学院大學出の日本通で日本人によく知られている。孫〔文〕から注意され、半年後には脱党した。のちに国民党内の反共理論家となった⁽⁵⁰⁾。」

1955年に出された古い研究であるので、細かい事実関係の誤認はさて置き、中国共産党の成立をかなり早い1920年9月とみなしている。これは波多野の持論であって、外務省囑託として中国共産党史の研究に専念していた1930年代にはすでに「同年〔1920年〕秋九月、上海仏租界霞飛路漁洋里二号『新青年』総編輯所（陳独秀宅）に於いて、中国共産党がはじめて成立した⁽⁵¹⁾。」と、波多野は1920年9月に中国共産党が成立したと明言している。

波多野は李漢俊にそれほど着目しているとはいえないが、中国共産党創立発起人として李漢俊がころうじて登場している。

しかし、波多野乾一が1920年9月に同時代的に中国共産党の成立を「目撃」したというわけではない。波多野は、1920年春到北京に旅行して質素な北京大学の図書館主任室で、早稲田大学出身で北京大学系統の文化運動の立役者として知られていた李大釗に会った。しかし、当時すでに李大釗がヴォイチンスキーに会っていて、共産主義運動にかかわっていたとはつゆも知らなかったと告白している⁽⁵²⁾。つまり波多野も1920年春の段階では中国に共産主義者が存在することに気がつかなかったのである⁽⁵³⁾。

波多野乾一は『支那の政党』（松本鎗吉と共著、東亜実進社、1919年⁽⁵⁴⁾）を刊行している。その後、波多野乾一は1920年に東京で村田孜郎とともに『支那問題』雑誌（支那問題社）を刊行した。『支那問題』は東京市芝区桜川町二十番地の支那問題社が発行所で、事実上、波多野と村田の二人による個人雑誌であり、中国の思想、文化、政治、外交、経済などの最新事情を紹介した。その後、1920年秋に波多野、村田ともに中国に赴任することになり、雑誌の存続が危ぶまれた。1921年早々、波多野乾一は『支那問題』に掲載した論文をまとめて『現代支那』（支那問題社、1921年）を刊行した。波多野乾一の「自序」（1920年12月）によると1920年8月に行きくことになり、2年間の東京生活の総決算として『支那問題』に発表した論文も含めまとめた、とある⁽⁵⁵⁾。『現代支那』は1300頁にも及ぶ大部のもので、章立ては第一章「対支国策の創生」、第二章「支那改造の理想と現実」、第三章「支那の政党政治」、第四章「最近政局史論」からなり、大半が中国政治や外交政策に関するもので、波多野の専門的な関心を示している。第二章「支那改造の理想と現実」の第二節「改造の基調としての文化運動」は、『現代支那』では分量的に十分の一にも満たないが、中国の思想界の現状を紹介したものである。一「北大系統の運動」、二「文化運動の厳正批判」、三「社会革命派の運動」、四「支那社会主義史」、五「過激派と支那」からなる。この中で四「社会主義思想史」は同盟会の地権平均、『民報』の民生主義、『新世紀』の無政府主義、社会党、国民党の民生政策等を扱い、さらのロシア革命やいわゆる初期社会主義思想にも言及する。マルクス主義に限定されない幅の広い社会主義が紹介される。五「過激派と支那」は村田孜郎の「労農露国と支那」（『支那問題』1920年6月号）を改題して転載したものである。「過激派」についての村田の取材力・分析力に波多野も一目置いていたであろう。『現代支那』は当時

中国の政治・外交・思想などの現状をまとめた形で紹介したほぼ唯一の書籍といってもよい。波多野は「拙著『現代支那——解説と提唱』が出来上つたばかりで、北京着と同時に氏〔芥川龍之介〕に贈呈して置いたから、その中の『改造の基調としての文化運動』を読んだからかも知れないと、私は自惚れてゐる⁽⁵⁶⁾。」と述べる。芥川龍之介も実際に手に取り、「新文化」系知識人、ヤング・チャイナについての予習をしたとみられる。

しかし、当時、ロシア10月革命以降の「労農露国」「過激派」についてリアルタイムで情報を得て、理解することは難しかった。日本と中国の知識人たちは必死に情報収集を行っていた。しかし、10月革命勃発当時、ボルシェビキのリーダーであるレーニンやトロツキーが何者であるのかすら分からなかったのである。

1917年のロシア10月革命後に日本で最初に翻訳されたボルシェヴィキ指導者の著作はレーニンのものではなく、トロツキーのものであった⁽⁵⁷⁾。トロツキーの『戦争とインターナショナル』（1914年、スイスで出版）は、1918年5月というきわめて早い時期に『過激派と世界平和』という表題で日本で翻訳（重訳）出版されている。アメリカの左翼ジャーナリストであったリンカーン・ジョセフ・ステフェンス（Joseph Lincoln Steffens, 1866-1936）がこの著作を英語に翻訳し、その時にタイトルが、より大衆受けするようにとの配慮で『ボルシェヴィキと世界の平和（Bolsheviki and World Peace）』に変えられた。室伏高信がこの著作を訳した当時、ステフェンスのこの英訳は、ボルシェヴィキ指導者による数少ない英語文献の一つであった。それゆえ同書は、当時、日本ではまったく知られていなかったボルシェヴィキ指導者の見解を曲がりなりにも理解する上で日本の知的読者層にとってきわめて貴重なものとなった。室伏高信はロシア語を解さず、トロツキーの著作を英語から重訳した。1918年当時、日本には（中国にも）共産主義者は一人もいなかった。同書によって、日本ではようやくロシア革命を主導したレーニン、トロツキーらボルシェビキが紹介されたことになり、その後小冊子、パンフレットの類を含めれば無数の紹介がなされるようになる⁽⁵⁸⁾。その際、ボルシェビキは「過激派」と翻訳されていた。

李大釗は1919年1月に「Bolshevismの勝利」を『新青年』（第5巻第5号、1919年1月）に発表し、連合国の勝利と軍国主義ドイツの降伏を祝した。連合国の勝利とは、人道主義、平和思想、公理、自由、民主主義、社会主義、Bolshevism、赤旗、世界労働階級、二十世紀新思潮の勝利であるという。Bolshevismの字はロシア人が作ったものだが、ロシア人の精神であり、二十世紀全世界の人類の心の中にとともにもつ覚悟の精神である。そのためBolshevismの勝利は、二十世紀世界人類の心の中にとともにもつ覚悟の新精神の勝利である、と述べる⁽⁵⁹⁾。李大釗は「Bolshevismの勝利」の中で上述の陀羅慈『Bolshevismと世界平和』に言及し詳しく紹介している。陀羅慈はトロツキーのことで、Bolshevismの語は中国語訳していない。李大釗がどの版本を読んだのか、定かではないが、いずれかの日本語訳を参照した可能性は否定できない。「平和」は和製漢語の響きが強く、現代中国語の用法では「和平」が通例であるからである。

一年近く後に、陳独秀が「過激派と世界平和」（『新青年』第七卷第一号、1919年12月1日⁽⁶⁰⁾）という小文を発表し、ロシアでの革命を主導しているボルシェビキに対する訳語としての「過激派」は日本的な用語法であり、不適切であると述べた。「過激派と世界平和」というタイトル自体がトロツキーの日訳書名『過激派と世界平和』を意識していることを示している。しかし、日訳『過激派と世界平和』と内容面の関連はない。陳独秀は過激派という言葉が、ボルシェビキに対する正確な理解を妨げていることを指摘しており、陳独秀のボルシェビキへの親近感をはじめて表明したものと今日の研究者によって理解されている。

1918年3月レーニン政府はペテルブルクからモスクワに首都を移したが、内戦が本格化する中で、赤軍（1918年1月創設）を1918年6月から7月にかけて徴兵制に切り替えた。次第にボルシェビキによる一党支配も固まって来た。1918年3月の第7回党大会でボルシェビキ党はロシア共産党と改称

し、1919年3月の第8回党大会で党はソヴィエトのなかで「自らの完全な政治支配を達成する」と一党支配の実現を目指すことを宣言した。1919年3月2日、モスクワで第三インターナショナル（コミンテルン）の第一回大会が招集された。ロシア革命の情勢はずっと流動的であり、3年間にもおよぶ内乱の後に、ボルシェビキが完全に権力を掌握することになる。中国では、ロシア10月革命後の情勢が刻々と報告される中で、「過激派」に対する認識が変化し、好意的なものが増えていく⁽⁶¹⁾。

七 村田孜郎の「過激派」理解

村田孜郎は『支那問題』の創刊号から中国の思想界の最新状況を紹介する力のこもった論説を続けざまに発表した。「支那の黎明運動を解説す」（『支那問題』創刊号、1920年3月）、「支那改造の基調としての社会主義」（『支那問題』第2号、1920年4月）、「労農露国と支那」（『支那問題』1920年6月号）などである。いずれも社会主義や過激派にかかわるものである。以下、その内容を紹介する。

「支那の黎明運動を解説す」では、「儒教の支那」「革命の支那」はすでに去って今や「改造の支那」が生まれつつある。現代支那における改造運動には二派あり、一つは実業改良より入ろうとする孫文一派の社会革命党で、もう一つは文学革命を提唱する北京大学教授陳独秀および胡適一派の新思想家たちである。孫文派の社会革命党でいえば、その機関誌『建設』を中心に、戴天仇〔戴季陶〕、朱執信、廖仲愷、胡漢民、汪兆銘がいる。戴天仇は『建設』とともに週刊新聞『星期評論』を発行し労働階級に接近している。新思想家としては陳独秀、胡適をはじめ李大釗、羅家倫、張崧年、周作人、徐彦之、任鴻雋、陶履恭、錢玄同、傅斯年、高一涵、葉紹鈞、康白情、顧誠吾、郭秉文、蔣夢麟などがいる。北京と上海を中心に文学改革、労働問題、婦人問題、その他一般社会問題に対して西洋学説を紹介している、と村田はいう⁽⁶²⁾。

続く「支那改造の基調としての社会主義」では、昨年〔1919年〕来、上海を中心に労働者によって賃上げを求める運動が起こり、階級打破が叫ばれた。これらは物価騰貴に脅威を感じた社会不安によるものである。このような社会不安を救済し、新しい支那を「建設」しようとした運動の基調として、社会主義および社会主義的思想研究の勃興を見たことは、今日の一大新現象として注目しなくてはならない。支那社会党を派毎に分けてみると、急進派、穏健派の二派と極端派の計三派に分かれる。それぞれ孫文の旧同盟会派と江亢虎一派の旧社会党系、および李石曾一派の共產主義派である。孫文派は戴天仇、胡漢民、朱執信、廖仲愷、馮自由、葉夏聲、汪兆銘など、江亢虎派は李懷霜、陳独秀、于右任、何天炯、蔡元培など、李石曾一派は張繼、吳稚暉、張靜江などである、と村田は多くの思想家名を挙げ、まとめている⁽⁶³⁾。「社会主義」思想の担い手として挙げられている思想家たちは、今日でいうマルクス主義者ではなく、孫文や孫文主義者を含め社会改良を目指す人たちといったものであることに注意したい。「社会主義」とは当時、非常に幅の広い概念であったのである。

「労農露国と支那」は「過激派」を紹介した注目すべき論文である。村田が言うには、コスモポリタンの本質を有する支那人は、マルキシストであるよりはボルシェヴィキシストであることにより多くの可能性があるようにみえる。盲目的愛国運動、雷同的国民性、軍閥を呪い解放を叫び人道主義の美名に酔う彼ら支那人たちは唯行く手一点の光明に憧れて、ほとんど本能的にボルシェヴィズムの殿堂に引き寄せられて行っている。破壊より破壊へ、新しきよりさらに新しきへと志す彼らに、過激主義がどれだけ理解されているかは分からない。しかし、民生主義の実現に努力しつつある孫文一派と文化運動からさらに社会革命へと入ろうとする陳独秀一派は、虎視眈々として民心の趨向をうかがっているようで、と村田はいう。

村田によれば、過激派の勢力がシベリアを占拠して間もなく、昨年〔1919年〕三月に過激派の宣伝員の一部が上海に入り込んだ。上海の英国官憲はこれに対して嚴重なる監視を行った。過激派の宣伝員

の活動は中国各地で見受けられ、支那は官憲の取り締まり時代に入っている、と。村田は、ボルシェビキによる中国における宣伝活動を見抜いていた。実際、1919年10月にイギリスの情報機関は、李漢俊はフランス租界における中国のボルシェビキの一人である、との報告を受け取っていた⁽⁶⁴⁾。

村田が言うには、1920年1月19日、イルクーツクが陥落し、コルチャック政府が転覆してから、シベリアの情勢は一変した。これに対する列強の対応は一致せず、北京政府も当初は対応に苦慮していたが、露国過激派は国境をこえて侵略的行動に出ないことが予想されたため、米国をはじめとする列強は対露方針を宥和的なものへと変更した。それにともない支那政府も対露楽観に転換した。その後、露国の労農政府はいわゆるカラハン宣言を発表し、旧ロシア政府が中国と結んだ不平等条約を破棄し、中国においてもっていた各種特権を廃棄することを北京政府に通牒した。このことによって、支那国民をして過激派の行動を認識せしめ、懷疑を一変することに十分であった。中国における世論は歓喜と感謝の声に満ちた。対露好感、労農政府謳歌の時代が到来したのである。しかし、支那の労働者に過激主義なるものが、どれだけ理解されているかと問うものがあれば、それははなはだ疑問である。戴天仇一派の社会革命党はもっぱら言論に依り講演により労働者たちの啓発に尽くしている。露国過激派のこれらの労働者に対する宣伝、と陳独秀、湯松、曹亜伯など社会主義者の接近が、かれらを無意識の中で過激思想に導きつつあることを否定することはできない、と⁽⁶⁵⁾。

村田は結論として、資本制度が発達せざる支那に於いて社会革命が起こりえぬとは真理である。同時に支那の官僚資本制度なものが普通の所謂資本制度より以上に革命の素因をなすものであるといいえる。官僚軍閥すなわち資本家であり貴族である支那は、より多き危険性に伴われているともいいえる。ようするに支那の現状では無論真の意味の社会主義あるいはボルシェビズムは行われえぬかもしれない。しかし、その思想問題の刺激と、その軍閥官僚に対する反感は、一度は大爆発をもたらさずにはおかない。最近の学生運動を見ても、愛国運動、文化運動、教育運動であったものが、人道運動、社会運動、労働運動さらに革命運動へと変化しつつある。すなわち従前の各種運動は単に日本攻撃あるいは現政府攻撃であったものが今や社会組織改造、または政治組織改造の運動に拡大されつつある。ボルシェビズム——それは今支那の若き人々の鼓膜に愛の女神の囁きと響いている、と村田はいう⁽⁶⁶⁾。

この村田の三つの論説を読み分析を加えるならば、村田孜郎「労農露国と支那」ではすでに「過激派」への言及があり、ボルシェビキに対するかなり早い言及が注目される。村田は中国思想界の最新状況について把握につとめ、「過激派」に共感をよせる知識人の存在についても気づいていた。しかし、社会改良を志すかなり幅の広い知識人群を「過激派」として捉えている。いわゆるロシアのボルシェビズムに共感をしめず、コミンテルンの誘いに応じ中国共产党創立に集った狭義のそれではない。中国における社会主義の信奉者については雑多な思想家群がイメージされており、混沌とした認識にすぎない。

村田の三つの論説の中で、李漢俊への言及はない。村田のいう「過激派」の人物群の中に李漢俊は含まれていない。村田孜郎「労農露国と支那」が載った『支那問題』の同じ号（1920年6月号）に李人傑への言及がある。宇治田直義（東亜同文書院教官）は、「知識階級のリーダーとして新思想を抱懐する人々を挙げれば我が帝大出身の工学士李人傑⁽⁶⁷⁾」と述べている。李漢俊は「日本帰り」で陳独秀ら『新青年』のグループにつながる「新思想」の担い手として認識されていたにすぎない。

おわりに

本稿では村田孜郎について1920年代前半の動静について彼の中国の思想界に対する分析をまじえながら詳しく言及した。村田は芥川をともなって李漢俊を訪ねる以前から、李漢俊に対する何らかの情報を得て、その情報をもとに訪問したのではと予測したためである。しかし、村田孜郎が李人傑を訪問す

ることになった直接的な契機を見つけ出すことはできなかった。いくつかの状況証拠から以下のような暫定的な結論を導き出した。

村田孜郎は北京大学に由来する新文化運動系の知識人に関心をもっていた。また『新青年』編集部（漁陽里。後に「革命の聖地」とされた）をしばしば訪ねており、陳独秀と接触をはかっていた。村田は「実をいへば私は上海に来てから既に数回陳独秀を訪問しその都度失敗した⁽⁶⁸⁾」と述べている。陳独秀に対する当局の監視が厳しく、陳独秀が外部との接触を避けていたことも関係している。『支那問題』の諸論説では陳独秀が酷評されていることが多い。例えば、『支那問題』創刊号（1920年3月）に載った「陳独秀君の噂」には、「北京大学の新思想衝突事件で名を売った陳独秀君は、北京の浅草ともいふべき「新世界」で、過激主義のビラを配つたといふので牢屋に打ち込まれていた」が意気揚々として北京に帰っている。「大したことも言って居らず、さしてエライ人物とも思へない」が、「支那製レニン」ともてはやされている、とある⁽⁶⁹⁾。村田は「中国のレーニン」である陳独秀と1922年に入ってようやく会えた。陳独秀との面談を求める交渉の過程で『新青年』編集部の関係者と接触したであろう。日本語が堪能で一時期、陳独秀とも親密な関係を築いていた戴季陶と親しかったことから、戴季陶から李漢俊の動静を聞いた可能性もある。

村田孜郎はジャーナリストとしての自負と使命感を持ち、中国の最新の状況をいち早く正確に把握しようとした。村田は「いはゆる支那研究の先覚者が自らも国士を以て任じ人またゆるした時代が過ぎて当今の支那浪人と称するもの、素質が甚だしく低下したのは慨嘆に堪へないことである⁽⁷⁰⁾」といい、「支那浪人」と自らを区別する意識を吐露している。村田が「支那の黎明運動を解説す」（『支那問題』1920年3月号）で述べたように、村田は当時の中国の知識界を孫文派と陳独秀・胡適派に二分し、ジャーナリストとしてこのどちらともパイプを結ぼうとしていた⁽⁷¹⁾。「過激派」についての研究のかたわら、孫文や蒋介石など国民党人に対して人脈的に深く食いこんでいる。蒋介石については故郷の浙江省溪口で長時間にわたるインタビューを行い⁽⁷²⁾、宋美齡についても周到な取材に基づいた評伝を著している⁽⁷³⁾。同時代的には、例えば、中国共産党結成を援助したコミンテルンのヴォイチンスキーは1920年4月に北京で李大釗に会った直後、上海に南下し陳独秀に面会し、ほぼ同時期に孫文とも上海で会っている。1927年以前には国民党と共産党の人士たちの境界が曖昧であったことを示している。

村田は上海において中国共産党結成に向かって動いていく集団（後年「上海小組」「中共早期組織」などと称された）についても明確な像を得ていたわけではなく、李漢俊についても社会革命に関心をもち新文化知識人の一人との位置づけに過ぎなかった。

波多野乾一は、後年、芥川について「名士訪問はあまり好きでなかつたらしく、その方面の注文はなかつた。ただ北京大学系統の新文化運動に対しては、相当興味を持つてゐたと見え、周作人、陳啓脩諸氏を一席扶桑館に招待して、日本酒を酌みながら、大いに議論してゐたのを覚えてゐる⁽⁷⁴⁾。」と述べる。章炳麟との面談で、芥川は「章炳麟氏はしっきりなしに、爪の長い手を振りながら、滔々と独特な説を述べた。私は——唯寒かった。」（「上海遊記 十一章炳麟氏」）と述べている。碩学に対して失礼な言い方は避けてはいるが、有名だったから会いに行ったものの、「老学者」の中国の現実の政治に対する繰り言が退屈だったというのが本音であろう。鄭孝胥との面談後に「誰でも支那へ行つて見るが好い。必ず一月とある内には、妙に政治を論じたい気がしてくる。」（「上海遊記 十三鄭孝胥氏」）と語ったのは、政治談議につきあってくれた著名な学者に対する敬意を示したものであって、必ずしも芥川の本心ではないと思われる。芥川にとって「芸術などより数段下等な」政治談議はそれほど興味をひかれるものではなかった。芥川は「名士訪問が嫌い」というよりは、通訳を介した「老学者」との会談が退屈だったのかもしれない。周作人、陳啓脩は日本語が堪能である。芥川は「新文化運動」に興味があり、李漢俊も日本語に堪能で「新文化」派という周作人や陳啓脩と同じ思想背景をもっている。日本語による打ち解けた会話もはずむ。

芥川は上海での取材活動の合間にダンスホール（カフェ・パリジャン）をはじめとした「場違いの西洋」を楽しんだ。「夜の上海」で痛飲し、宿舍の万歳館まで夜通し歩いて帰ったこともある⁽⁷⁵⁾。他方、「昼の上海」ではジャーナリストであることを強いられており、ストレスがたまることもあったに違いない。しかし、李漢俊との面談は、芥川にとって非常に愉快なものだった。『支那遊記』で李漢俊についてあれこれ特筆したのもそのためである⁽⁷⁶⁾。芥川は村田から李漢俊を紹介されて訪れ、互いに初対面であったが、まさに幸運な出会いとなったのである。

注

- (1) 和田博文「芥川の上海体験」『国文学』「芥川龍之介 モダン＝現代とは何か」特集号、第46巻11号、2001年9月号。
- (2) 関口安義『特派員芥川龍之介——中国で何を視たのか』毎日新聞社、1997年。
- (3) 『芥川龍之介全集』第8巻、ちくま文庫、1989年、71頁（この文庫版全集は1971年に刊行された筑摩全集類聚版芥川龍之介全集を底本にしている）。
- (4) 青柳達雄「李人傑について——芥川龍之介『支那遊記』中の人物」『国文学——文学と文芸』第103号、大塚国語国文学会、1988年。単援朝「上海の芥川龍之介——共産党の代表者李人傑との接触」『日本の文学』第8集、有精堂出版、1990年。
- (5) 村田孜郎『支那の左翼戦線』万里閣書房、1930年、169頁。
- (6) 芥川龍之介「日本小説の支那訳」『芥川龍之介全集』第12巻、岩波書店、1996年、122頁。
- (7) 秦剛「中国における芥川研究」宮坂覚編『芥川龍之介作品論集成別巻 芥川文学の周辺』翰林書房、2001年、151頁。秦剛は左翼文壇が有力だった日本の文壇の芥川に対する低い評価と『支那遊記』にみえる「中国蔑視」的な表現が影響したと見る。
- (8) 芥川龍之介『支那遊記』（改造社、1925年11月）は、翌1926年4月に夏丐尊による中国語訳（抄訳）が「芥川龍之介氏の中国観」と題して雑誌『小説月報』に発表された。その後、「中国遊記」と改題され、訳文集『芥川龍之介集』（開明書店、1927年12月）の附録として収録された。
- (9) 徐静波「芥川龍之介と「ヤングチャイナ」の李人傑との出会い」和田博文他編『上海の日本人社会とメディア』岩波書店、2014年、74頁。
- (10) 石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店、2001年、2頁。
- (11) 『芥川龍之介全集』第19巻、岩波書店、1997年、166頁。
- (12) 『芥川龍之介全集』第19巻、岩波書店、1997年、347頁の編者（宮坂覚）注で調べきれていない部分について指摘しておく。李経（^マ）遇は李経邁（1877-1938）、余穀民は余洵のことである。余洵は革新的な論調で知られる『神州日報』（1907年創刊）の責任者（1917-1927）をつとめていた。この書簡には中国側面会者として5名（章炳麟、鄭孝胥、李経邁、余洵、李人傑）が挙がっているが、李経邁と余洵は『支那遊記』には登場しない。
- (13) 石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店、2001年、342頁。
- (14) 沢村幸夫については、荻野脩二「『支那通』について」『中国研究月報』第554号、1994年、同「ある『支那通』の軌跡——沢村幸夫について」『関西大学中国文学会紀要』第15号、1994年、澤村夏夫「父・澤村幸夫について」『孫文研究』第33号、2003年1月がある。
- (15) 西田禎元「芥川龍之介と上海」『創大アジア研究』第17号、創価大学アジア研究所、1996年3月、7頁。
- (16) 芥川は4月23日に「退院」としているが、宗方小太郎日記の記述では、4月21日の宴席に出席していることから、退院前の数日は外出自由の状況だったのであろう。
- (17) ジョーンズはアイルランド出身、1915年来日し、大蔵商業（今の東京経済大学）で英語を教えた後、ライター通信社東京支局の記者となった。日本文学や日本文化に強い関心をもっており、『新思潮』の同人である芥川や久米正雄、東京帝大の学生たちと交流した。芥川とは旧知の間柄で親しく付き合っていた。
- (18) 日本の学界で「ヤング・チャイナ」「若き中国」と少年中国学会を同一視する記述がよく見られる。少年中国学会とヤング・チャイナは異なる。少年中国学会は李大釗のもとで先進的な学生たちが1919年7月に組織した団体であり、当時の中国においては「ヤング・チャイナ」の一部に過ぎない。
- (19) 小澤保博「芥川龍之介『支那遊記』研究（中）」『琉球大学教育学部紀要』第77号、2010年、9頁。

(20) 村田孜郎の著訳書についてのリスト（暫定版）は以下の通り。

（著書）

- 『支那の左翼戦線』 万里閣書房, 1930 年 4 月
- 『支那女人絵巻』 文聖舎, 1934 年
- 『北支独立運動の真相』 今日の問題社, 1935 年 11 月
- 『解説北支に関する日支関係条約』 学芸社, 1935 年
- 『最近北支事情叢書 卷之七』 学芸社, 1935 年
- 『風雲蒙古』 昭森社, 1936 年
- 『蒙古民族の動き綏遠問題の真相』 第百書房, 1936 年
- 『支那女人譚』 古今荘, 1937 年
- 『北支の解剖』 六人社, 1937 年
- 『徐州陥落とその後に来るもの』 銀座書房, 1938 年
- 『広東と香港』 銀座書房, 1938 年
- 『宋美齡』 ヘラルド雑誌社, 1939 年

（共著）

- 『大支那大系 第十二巻 文学・演劇篇 下巻』 万里閣書房, 1930 年, 他 20 冊
（翻訳）

ハレット・アーバント, アンソニー・ビリングガム（村田孜郎・中村常三共訳）『支那は生存し得るか』 教材社, 1937 年

蒋介石『百万民衆に訴ふ 附・西安監禁半月記』 河出書房, 1937 年 6 月

呉済生『抗戦の首都重慶』 大東出版社, 1940 年

郭沫若『海棠香国』 興亜書房, 1940 年 11 月

楊幼嫻『支那政治思想史』 大東出版社, 1940 年

凌淑華『お千代さん』 興亜書局, 1941 年

楊仲華『支那西康事情』 誠文堂新光社, 1941 年

陳東原『支那女性生活史』 大東出版社, 1941 年

郭沫若『漂流三部曲』 中華文芸叢書, 聖光社, 1946 年

巴金『砂丁』 聖光社, 1946 年 12 月

郭沫若『我が思い出』 中華文芸叢書, 聖光社, 1947 年

(21) 『東亜同文書院大学史』 滬友会, 1982 年, 426 頁。

(22) 高橋龍夫「村田孜郎 中日文化交流の先駆者」和田博文他編『「異郷」としての大連・上海・台北』 勉誠出版, 2015 年, 225 頁。

(23) 中山正治『新聞に見る日中関係史』 研文出版, 1996 年, 15 頁（巻末）。

(24) 朝日新聞上海特派員などをつとめた須田禎一（1909-73）はその著『独絃のペン 交響のペン——ジャーナリスト 30 年』（勁草書房, 1969 年）の中で 1945 年の村田の死に立ち会い, 「村田老は日本の敗戦の直後, 文字通り上海の陋巷で病没した（いわゆる死水はほくがとった）。」（同 30 頁）, また「キャセイ・マンションに住む日本人はまだ少なかった。その同宿者のなかにジャーナリストの大先輩村田孜郎がいた。村田さんは毎日や読売の東亜部長を歴任し, 当時は大使館の嘱託だった（大使館はこの老上海に軽少な嘱託費しか出さなかった。）」（同 26 頁）と記している。

(25) 『東亜同文書院大学史』 滬友会, 1982 年, 290-291 頁。

(26) 中島一仁「幕末期プロテスタント受洗者の研究（三）——史料に探る村田政矩」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』 第 10 号, 佐賀大学地域学歴史文化研究センター, 2016 年, 3 頁。

(27) 井上篤夫『フルベッキ伝』 国書刊行会, 2022 年, 100 頁。

(28) 大里浩秋「宗方小太郎日記 大正 9~10 年」『人文学研究所報』 第 58 号, 神奈川大学人文学研究所, 2017 年 9 月に依った。宗方小太郎については, 大里浩秋「宗方小太郎日記」竹内房司編『日記に読む近代日本 5 アジアと日本』 吉川弘文館, 2012 年, 参照。

(29) 陳祖恩（森平崇文監訳）『上海の日本文化地図』 上海文芸出版, 2012 年, 69 頁。

(30) 平川清風『支那共和史』 春申社, 1920 年, 4 頁。

- (31) 石川禎浩「雑誌『上海』『上海週報』記事目録・解説」濱田正美『近世以降の中国における宗教世界の多元性とその相互受容』科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書，2001年がある。
- (32) 村田孜郎「袴と架子」（雑誌『上海』1000号，春申社，1940年11月）の中で，上海の南京路のはずれにひっそりと住んでいた鄭孝胥との面談の場面を回顧している。
- (33) 芥川は3月19日東京発，列車内で高熱を發し，大阪で下車，大阪毎日新聞の学芸部長であった薄田淳介（泣童）に伴われ近所の北川旅館で静養し，3月28日門司港より筑後丸で上海に向かい，30日夕刻に上海港着。
- (34) 上海に着いた翌日3月31日から病床の身になり，翌4月1日からは乾性肋膜炎により里見病院で入院生活を送ることになる。4月2日に万歳館で面会しているところを見るとまだ完全入院という状況ではなかったことが分かる。
- (35) 陳祖恩著，大里浩秋監訳『上海に生きた日本人——幕末から敗戦まで』大修館書店，2010年の「第7章 東洋旅館——「邦人」の家」，112頁。
- (36) 藤谷浩悦「芥川龍之介の長沙遊歴——1921年の排日運動を中心に」『中国研究月報』第74巻第5号，2020年5月，30頁。
- (37) 『東亜同文書院大学史』滬友会，1982年，291頁。
- (38) 波多野乾一「北京と芥川龍之介」『大陸』1940年6月号，227頁。波多野乾一の記事等の発掘は，秦剛「芥川龍之介の中国視察の案内人——村田孜郎，波多野乾一に関する資料拾遺」『芥川龍之介研究』第15号，2021年による。
- (39) 1921年3月26日付芥川道章宛書簡，『芥川龍之介全集』第19巻，岩波書店，1997年，160頁。
- (40) 1921年5月17日付芥川道章宛書簡，『芥川龍之介全集』第19巻，岩波書店，1997年，173頁。
- (41) 川尻文彦「李漢俊について——中国共产党創建の思想的背景と『星期評論』によるマルクス主義学説の紹介」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第24号，2023年，221頁。
- (42) 沈建中『陳独秀在上海』中共党史出版社，2018年，12頁。
- (43) 村田孜郎「左翼戦線の人々」『支那の左翼戦線』万里閣書房，1930年，169頁。
- (44) 李丹陽・劉健一「李漢俊与孫中山の關係及其他——李漢俊『十四年前的回顧』的解読及若干考証」『史学月刊』2022年第10期，64頁。
- (45) 章念馳「章太炎・黄紹蘭・博文女校——一件世所忽略の珍貴建党資料」『社会科学』1991年第7期，55頁。
- (46) 村田孜郎「思い出の人々——一，孫文」『支那の左翼戦線』万里閣書房，1930年，248～249頁。
- (47) 「東亜の一国である事を忘れて了つた日本——感慨深い七年目の来朝」（『大阪毎日新聞』1924年11月23日）陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」史料集——一九二四年十一月 日本と中国の岐路』法律文化社，1989年，84頁。
- (48) 桑兵主編『孫中山史事編年』第十一卷（一九二四・九～一九二四・十二）中華書局，2017年，5959頁に，村田による『大阪毎日新聞』の三記事と中国での『民国日報』『申報』（1924年11月24日付）の記事との間の違いについて指摘がある。村田の記事はより内容豊富であり，孫文が実際にしゃべった内容以上のことが含まれていると思われると指摘する。おそらく村田は孫文との数年にわたる付き合いを通じて得た情報を加味して記事を作成したのであろう。
- (49) 佐藤公彦『陳独秀——その思想と生涯1879-1942』集広舎，2019年，154頁。石川禎浩は「中国共产党宣言」や『共産党』といった文書が出された1920年11月を中国共产党の成立時期と見なす（石川禎浩『中国共产党成立史』岩波書店，2001年，235頁）。
- (50) 波多野乾一『中国の国民党と共産党』弘文堂，1955年，30頁。
- (51) 波多野乾一編『資料集成 中国共产党史』第一巻（一九二〇～三一）時事通信社，1961年，26頁。原書は1938年発行。波多野乾一によれば，1932年頃には成稿していたという（同「序」）。
- (52) 波多野乾一『中国の国民党と共産党』弘文堂，1955年，27頁。
- (53) 石川禎浩『赤い星はいかにして昇ったか——知られざる毛沢東の初期イメージ』臨川書店，2016年は，1930年代以降の波多野乾一の中国共产党史研究に触れる。
- (54) 波多野乾一・松本鎗吉『支那の政党』（東亜実進社，1919年）は清末から民国初の中国政治史・政党史を扱う。当時，波多野は東京日日新聞記者，松本は大阪毎日新聞記者であった。本書巻頭に孫文の題字「畫虎不成」が掲げられている。本書「自序」によれば，大正4，5年に北京に滞在した時に松本鎗吉が中国政党史にかかわる史料収集を行い，帰国後，波多野乾一がこれを整理し起稿し大正6年5月までにおおかたの記述を終

- え、「支那政党史稿」と題して東亜同文会発行の雑誌『支那』に連載していったものを、その後大正7年末までの記事を増補して出版した、という。
- (55) 波多野乾一「自序」『現代支那』支那問題社、1921年、1頁。
 - (56) 波多野乾一「北京と芥川龍之介」『大陸』1940年6月号、226頁。
 - (57) 森田成也『トロツキーと戦前の日本——ミカドの国の預言者』社会評論社、2022年、27頁。
 - (58) その一つは、トロツキー著、岡悌治訳「過激派と世界の平和」『大日本』第6号、大日本社、1918年。
 - (59) 李大釗「Bolshevism 的勝利」『李大釗全集』第二卷、人民出版社、2013年、368頁。
 - (60) 陳独秀「過激派と世界和平」『新青年』第七卷第一号、1919年12月1日、115-116頁。
 - (61) 楊奎松（川尻文彦訳）「十月革命の中国五四時期社会主義思想への影響」『現代中国』92号、日本現代中国学会、2014年、13頁。
 - (62) 村田孜郎「支那の黎明運動を解説す」『支那問題』創刊号、1920年3月、52頁。
 - (63) 村田孜郎「支那改造の基調としての社会主義」『支那問題』第2号、1920年4月、110頁。
 - (64) 李丹陽「李漢俊と中国共産主義運動起源」『史学月刊』2012年第7期、56頁。FO（イギリス外交部檔案）405/228, 105号ファイル（1920年4月7日）。
 - (65) 村田孜郎「労働露国と支那」『支那問題』1920年6月号、278頁。
 - (66) 村田孜郎「労働露国と支那」『支那問題』1920年6月号、281頁。
 - (67) 宇治田直義「支那の新思想家大観」『支那問題』1920年6月号、362頁。
 - (68) 村田孜郎「左翼戦線の人々」『支那の左翼戦線』万里閣書房、1930年、169頁。
 - (69) 「陳独秀君の噂」『支那問題』創刊号、1920年3月、60頁。
 - (70) 村田孜郎「支那取物語」『支那の左翼戦線』万里閣書房、1930年、282頁。
 - (71) 村田孜郎「支那の黎明運動を解説す」『支那問題』創刊号、1920年3月、51頁。
 - (72) 村田孜郎「或る日の蒋介石」『支那の左翼戦線』万里閣書房、1930年、187頁。
 - (73) 村田孜郎『宋美齡』ヘラルド雑誌社、1939年（ゆまに書房、2016年復刻）。
 - (74) 波多野乾一「北京と芥川龍之介」『大陸』1940年6月号、226頁。
 - (75) 榎本泰子「芥川龍之介と「彼」の上海の夜」榎本泰子・森本頼子・藤野詩織編『上海フランス租界への招待——日仏中三か国の文化交流』勉誠出版、2022年、284頁。
 - (76) 『改造』「現代支那」特集号（1926年7月）に李人傑の論文「中国無産階級とその運動の特質」が載ったのは、芥川龍之介『支那遊記』が1925年に改造社から出版されたことと無縁ではないだろう。同特集号には、胡適、馮友蘭、高一涵、馬寅初、陳望道ら当代の錚々たる知識人が寄稿した。李人傑論文は、中国における労働運動の現状を紹介したもののだが、著名な論者に並んで、肩書きがなく「無名」の李人傑が胡適に次ぐ第二論文の座を与えられているのは異例である。

About Murata Shiro a journalist of Osaka Mainichi Shinbun in Shanghai:

Why did Akutagawa Ryunosuke go to French concession in
Shanghai to see Li Renjie in April 1921

Kawajiri Fumihiko

Akutagawa Ryunosuke went to China in March 1921 as a journalist of Osaka Mainichi Shinbun. He stayed in China for about 120 days and looked around Shanghai, Nanjing, Changsha, Beijing and other cities. After going back to Japan, he wrote some travel essays and published a book named 'Shina Yuuki' in 1925. He met some Chinese intellectuals like Zhang Taiyan, Zheng Xiaoxu, Li Renjie, Gu Hongming. Among them, only Li Renjie was not famous. Any Researcher didn't know who he is. Recently, we got to know he was Li Hanjun a founding member of Chinese Communist Party and his house, where Akutagawa and Li Renjie met each other in Shanghai, is the place of the first meeting of CCP in July 1921. A journalist of Osaka Mainichi Shinbun named Murata Shiro took Akutagawa to Li Renjie's house. In this paper, I will focus on Murata Shiro and research about the reason why Murata introduced Li Renjie to Akutagawa.

Key words: Murata Shiro, Akutagawa Ryunosuke, Li Renjie (Li Hanjun), Shanghai, Chinese Communist Party